

## 志筑忠雄「万国管闕」の文献学的研究

大島, 明秀  
熊本県立大学文学部

<https://hdl.handle.net/2324/2328864>

---

出版情報：雅俗. 17, pp.52-72, 2018-07. 雅俗の会  
バージョン：  
権利関係：

雅  
俗

志筑忠雄  
「万国管闕」  
の文献学的研究

大島  
明秀

第十七号  
平成三十年七月

## 志筑忠雄「万国管闕」の文献学的研究

大島 明秀

はじめに

戦災で焼失した「天文管闕」<sup>1)</sup>（二七八二序）などと並んで、「万国管闕」（一七八二序）は志筑忠雄の最初期の仕事として周知されている。志筑の科学的側面を分析してきた吉田忠は、いち早くこの著作に着目し、現長崎歴史文化博物館蔵本（旧長崎県立図書館蔵）を用いて内容分析を行い、結果、「万国管闕」の構成や概要、また、志筑が参照した蘭書等が把握できるようになった<sup>2)</sup>。

一方で、研究上の課題も山積している。例えば、「万国管闕」写本が複数伝存している状況を直視すると<sup>3)</sup>、文献学的なアプローチの必要性が浮上する。はたまた、受容史の観点に立つと、書物の享受や伝播をめぐる状況についても説明が俟たれるところである。

以上を踏まえて、本稿では、「万国管闕」の書誌調査を基軸として、諸本の収集・比較により写本間の異同を洗い出しながら、諸本の関係性を検討しつつ、テキストの原型追究と志筑序の復元を試みる。加えて、若き日の志筑忠雄の著作である「万国管闕」を、近世読者がどのように受容したのかについて考察する。

## 一、現存写本一五点の概要

調査により各地に一五点の「万国管闕」写本が伝存していることが判明した。以下、諸本の書誌を、法量、形態、紙数、表記、外題、内題、志筑序文の有無（年記）、奥書の有無の順に記載し、その他書写・蔵書に係る識語、蔵書印記、貼紙、備考は認められる場合のみ記し、引用部分は底本の表記をできるだけ反映させた。なお、現所蔵機関に係る蔵書印や貼紙は採録しなかった。諸機関の配列は、かねてより志筑自筆本と示唆される長崎歴史文化博物館本を最初に掲げ、以降は所蔵機関名の五十音順（一つの所蔵機関に複数ある場合は請求番号の若い順）とし、最後に架蔵本を配置した。

## 1、長崎歴史文化博物館

法量…二七・二×二〇・七糎

形態…写本、一冊、上下二巻（七巻）

紙数…五九丁

表記…漢字カタカナ交じり文

外題…萬國管闕

内題…萬國管闕

志筑序文(年記)…「天明二壬寅之仲秋／肥前長崎晩生志筑忠次郎盈

長叙」

奥書…なし

蔵書印記…「風中書屋」(朱・陽)

…不明陽刻朱印一顆

備考…渡辺庫輔(風中書屋)旧蔵本

…用紙は裏紙を使用

…上巻冒頭に「卷之一 雑誌上」とあり、途中「雑誌二」とあ

るが巻数表示はなく、下冊「西域志」に「卷七」とあり

…項目227の大半欠落

…自筆本との推測あり<sup>(4)</sup>

## 2、大洲市立図書館

法量…二四・一×一六・七糎

形態…写本、一冊、上下二巻

紙数…三二丁

表記…漢字カタカナ交じり文

外題…萬國管闕

志筑 柳圃先生 編輯  
自然居士 抄録並票註

内題…萬國管闕

志筑序文(年記)…なし

蔵書印記…「天野氏記」(朱・陽)、「大冢蜂郎」(朱・陽)、「庵」(朱・

陽)、「後樂閑人」(朱・陽)

備考…抄本

…内題著書名に「志筑柳圃先生編 自然居士抄録」とあり。

…印主の大冢蜂郎とは、蘭学者・大塚同庵のこと

…平田派の国学者で、明治期には皇典講究所の初代文学部長な  
どをつとめた矢野玄道(後樂閑人、一八二三～八七)の旧蔵書

## 3、岡山大学附属図書館

法量…二六・二×一八・二糎

形態…写本、一冊、乾坤二巻

紙数…七〇丁

表記…漢字カタカナ交じり文

外題…なし

内題…萬國管闕

志筑序文(年記)…跋としてあり<sup>(5)</sup>

…序の年記は本奥書となっている

奥書…「天明二壬寅仲秋／肥前長崎晩生／志筑忠次郎盈長書」

…「寛政甲寅冬十一月摸之／東都芝門神僊坐／春波樓主人

Kokan」

…「池田長發校／中村敬輔校」

蔵書印記…「本池田家蔵書」(朱・陽)

貼紙…「雑書／第五一五號／一冊」

備考…蘭学者・司馬江漢(春波樓主人、一七四七～一八一八)系統

本の写し

…見返しめくれ裏に「志筑忠次郎盈長所著萬國管闕二巻／帝佑

／萬國管闕 乾坤」

…錯簡あり

…岡山藩池田家旧蔵(池田侯爵家襲蔵)

#### 4、杵築市立図書館

法量…二五・九×一八・一糎

形態…写本、一冊、上下二卷

紙数…七三丁

表記…漢字カタカナ交じり文

外題…萬國<sup>〔破損〕</sup>

内題…萬國管闕

志筑序文(年記)…なし

奥書…なし

貼紙…「大分縣杵築梅園文庫圖書／地理部／第五號／全一冊ノ内第

一冊」

備考…冒頭に九葉の図あり

#### 5、岐阜県歴史資料館

法量…二五・〇×一七・二糎

形態…写本、一冊、七卷

紙数…三八丁

表記…漢字カタカナ交じり文

外題…萬國管闕

内題…萬國管闕

志筑序文(年記)…なし

奥書…なし

備考…破損で細部まで確認できない箇所あり

#### 6、京都大学附属図書館

法量…二三・六×一六・八糎

形態…写本、一冊、上下二卷

紙数…五〇丁

表記…漢字ひらがなカタカナ交じり文

外題…武道撫萃録<sup>〔萬國管闕〕</sup>

内題…萬國管闕

志筑序文(年記)…なし

奥書…なし

蔵書印記…「翠実園蔵書」(朱・陽)

備考…深澤陳清が編んだ「武道撫萃録」の卷三二六。近世後期の編

纂と見られる

#### 7、国会図書館

法量…二四・二×一六・九糎

形態…写本、一冊、上下二卷

紙数…上卷四六丁、下卷三八丁

表記…漢字ひらがなカタカナ交じり文

外題…萬國<sup>〔破損〕</sup>

内題…萬國管闕

志筑序文(年記)…なし

奥書…なし

蔵書印記…「大」(黒・陰)

備考…蔵書印主は、尾張の貸本屋・大野屋惣八<sup>6)</sup>

…国会図書館が明治三二年(一八九九)三月三〇日に購入

## 8、津市図書館A

法量…二四・〇×一六・九糎

形態…写本、二冊、七卷

紙数…上卷三七丁、下卷二七丁

表記…漢字カタカナ交じり文

外題…校<sup>四</sup>□萬國管闕

内題…□<sup>四</sup>正萬國管闕

志筑序文(年記)…なし

奥書…なし

蔵書印記…「從雉堂藏」(朱・陽)、「凸頭牧人」(朱・陰)

備考…校訂者・竹篁居士(稲垣定毅<sup>7)</sup>)の文化九年十月序によれ

ば、京師の市で「万国管闕」を入手したが、謄写が杜撰で誤

謬・錯乱が甚だしかつたため、旧聞を集めて校正したという

…呉服商・両替業を営みつつ、天文・地理学を修めた伊勢商

人・稲垣定毅(從雉堂、凸頭牧人、竹篁居士、一七六四〜一

八三五)筆写本

…諸本でカタカナ表記の外來語に漢字を宛てている

…虫損あり

## 9、津市図書館B

法量…二五・〇×一六・九糎

形態…写本、一冊、七卷

紙数…四五丁

表記…漢字カタカナ交じり文

外題…萬國管闕

内題…萬國管闕

志筑序文(年記)…なし

奥書…「典学堂藏」

…「文化八辛未十月朔間之街於寓居凸頭牧人寫焉」

識語…「朱書者吉雄耕牛翁以藏書校焉」

備考…稲垣定毅筆写本

…阿蘭陀通詞・吉雄耕牛(一七二四〜一八〇〇)の注あり

…虫損大

## 10、同志社大学図書館

法量…二三・四×一六・二糎

形態…写本、一冊、上下二卷

紙数…六〇丁

表記…漢字カタカナ交じり文

外題…万国管闕

内題…萬國管闕

志筑序文(年記)…なし

奥書…「寛政七年乙卯中秋写之／四時堂藏」

蔵書印記：「荒木文庫」（朱・陽）

備考：内題著者名に「松世綱 安之君説」と、阿蘭陀通詞・松村元網の名が見える。元網の名は、「阿蘭陀地球図説」（一七七二成）をはじめとする阿蘭陀通詞・本木良永（一七三五～九四）の天文・地理関係図書の校訂者として登場する。また、自身も「蛮産諸品訳稿」（一七八七写）を著すなど、主に安永・天明年間に著作を残した

…大阪府下浜寺（現堺市西区）に在住した荒木和一氏の旧蔵書、昭和三三（一九五八）年一月に寄贈された

### 11、同朋大学・名古屋音楽大学図書館

法量：二四・七×一六・八糎

形態：写本、一冊、上下二巻

紙数：六〇丁

表記：漢字カタカナ交じり文

外題：萬國管闕

内題：萬國管闕

志筑序文（年記）：なし

奥書：なし

備考：同館が所蔵する目録には、尾張藩士で地誌関係の著作をもっている朝夷厚生（一七四八～一八二九）の書写とあるが、根拠は不明

…名古屋真宗大谷派福音寺一二世で、護法運動を展開した佐竹得照（一八一七～六六）旧蔵本

### 12、東洋文庫ライブラリ

法量：二一・六×一五・四糎

形態：写本、一冊一巻

紙数：一一丁

表記：漢字カタカナ交じり文

外題：萬國管闕

内題：萬國管闕

志筑序文（年記）：なし

奥書：「天明八戌甲三月日 玄洲写」

…寛政四年壬子三月卅日写 蘭山

備考：抄本

…小野蘭山自筆本

…全体は一五丁、三宅也来「萬金産業袋」（二二丁～一五丁）の

抄本との合綴

…岩崎久彌旧蔵本

### 13、横浜市立大学学術情報センターA

法量：二六・八×一九・二糎

形態：写本、二冊、乾坤二巻

紙数：乾卷三二丁、坤卷四三丁

表記：漢字カタカナ交じり文

外題：萬國管闕

内題：萬國管闕

志筑序文（年記）：跋としてあり

…序の年記は本奥書となっている

奥書…「天明二壬寅仲秋／肥前長崎晩生／志筑忠次郎益長書」

…「寛政甲<sup>〔破損〕</sup>□冬十一月摸之／東都芝門神僊坐／春波樓主人

Kokan.]

備考…蘭学者・司馬江漢（春波樓主人、一七四七〜一八一八）系統

本の写し

…錯簡あり

…坤巻裏表紙見返しに鮎澤信太郎に対する書肆からの昭和一六年（一九四一）一〇月六日付請求書の貼付あり。これによる

と、「万国管闕」は六円五十銭で取引された

…鮎澤信太郎旧蔵本

#### 14、横浜市立大学学術情報センターB

法量…二二・五×一五・七糎

形態…写本、一冊、上下二巻

紙数…五六丁

表記…漢字ひらがなカタカナ交じり文

外題…萬國管闕

内題…萬國管闕

志筑序文（年記）…なし

奥書…なし

備考…鮎澤信太郎旧蔵本

#### 15、架蔵

法量…二三・〇×一六・三糎

形態…写本、存一冊三巻（もとは二冊七巻か）

紙数…上巻四三丁

表記…漢字カタカナ交じり文

外題…萬國管闕

内題…萬國管闕

志筑序文（年記）…不明（序の部分には該当文なし）

奥書…不明

蔵書印記…「近淡國蒲生郡八幡人西川善六源吉輔文庫之記」

備考…上巻のみ存

…印主の西川吉輔は、近江八幡の干鯛商・西川屋善六第七代目

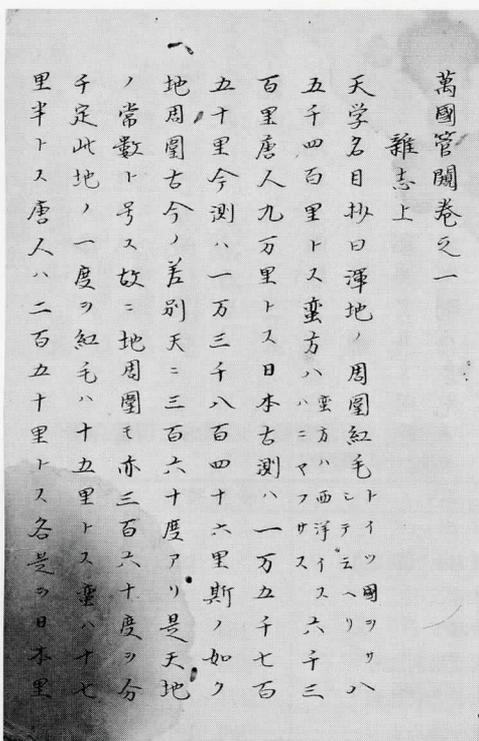


図1-1 架蔵本の内題



図1-2 西川吉輔の印

当主で、大國隆正に学び国学の道を志した人物。吉輔の雜記帳「甲寅禎亭日札」には、安政元年（一八五四）から同三年の讀書記録が残され、そこには「万国管闕」の名が見える<sup>(8)</sup>

以上、諸本で巻数の異同があることや、また、大半の本が志筑忠雄序文を備えていないことなどが判明した。その他、松村元綱が著作に関わることを示唆するような同志社大学本の存在や、吉雄耕牛、司馬江漢、小野蘭山、大塚同庵といった蘭学者のほか、稲垣定毅、西川吉輔、佐竹得照ならびに深澤陳清の所有が認められるなど、「万国管闕」の伝来経緯の一端が浮き彫りとなった。

## 二、諸本の文献学的研究

以下、諸本の校合にあたっては、自筆本と示唆されてきた長崎歴史文化博物館本（以下、長崎本）を柱に据え、これと諸本との異同を追究する形で行う。よって、まずは長崎本の内容構成を掲げた上で、構成や記述上の様々な要素に着目し、異同を明らかにしていく。

### (一) 長崎本の内容構成

長崎本「万国管闕」は、志筑忠雄序文と本文から成る。以下、吉田忠が作成した表をもとに、改めて構成と項目の関係をまとめなおしたものが表1で、全項目を掲げたものが表2である。なお、表1の作成にあたっては基本的には吉田作成表を踏襲したが、便宜上、枠組みを改変した。表2は項目を配列順に整理したものであるが、吉田作成の「附録」に基づいて項目名を記した。ただし、見落とされていた項目番号39および195を追加し、また、いくつかの項目名について、より内容を反映した表現に修正するなど、変更を加えた<sup>(9)</sup>。

本文の内容は、世界事情に関する様々な雜記で、各項目は丸印を用いた一つ書形式で記されている。これまでに二二五の項目が指摘されてきたが、改めて確認したところ、項目数は総計二二七を数えた。

本文は、上巻「卷之一 雜志上」（一五二項目）と下巻「雜録下」で構成され、上巻は項目番号35から「雜志二」、さらに「雜録下」は「南亞墨利加志」、「北亞米利加志」、「地中海辺志」、「西域志」の四部に分かれている。巻二から巻六まで巻数表示は認められないが、最後の「西域志」にのみ、本文と同筆の墨書で「万国管闕 卷七」と付されて

表1 長崎本「万国管闕」の構成と項目の関係（巻2-6の表示なし）

内 容	項目番号	項目数
• 序		
• 雜志上（卷之1）	1-152	152
雜志二	(34-152)	(119)
• 雜録下	153-227	75
南亞墨利加志	(153-171)	(19)
北亞米利加志	(171-179)	(8)
地中海辺志	(180-191)	(12)
西域志（卷7）	(192-227)	(36)

表2 長崎本「万国管闡」の全項目（括弧内に原文表記、原文は初出のみ記した）

上巻	
巻之一 雑誌上	
1	天学名目鈔による渾地の周囲
2	地周1度の距離の東西比較
3	西洋1里の距離
4	五大州の位置説明
5	地中海および紅海
6	ヨーロッパ（欧羅巴）諸国は耶蘇教を信じ、トルコ（テユルク）王及びアフリカ（利未亜）諸侯はモール教を信ず
7	インド（天竺）諸国、ブッダ（浮屠）を信ず
8	ヨーロッパの中でロシア、ドイツ、トルコ（テユルク）は三大王あり
9	温帯（暖帯）と東風
10	天明2年は西暦1782年
11	日本では（吾）喪服に白きを用ゆ、ヨーロッパ（彼）は黒を用ゆ
12	ヨーロッパ諸国と国民の性質
13	上ドイツと下ドイツ
14	西洋の爵位
15	イギリス（諳厄利亞国）人航海術を善くす
16	オランダ（阿蘭陀）語は下ドイツ言葉なり
17	西洋暦法
18	耶蘇教の祖キリスト（キリストス）とゴット
19	ムハンマド（マホメット）とムガール国（莫臥爾国、モーレン）
20	アフリカ（利未亜）の内のムガール国
21	インド（印度）、中国、日本の蘭名
22	蝦夷は日本人を呼んでシャモと云う
23	ベルシャ（波斯）国、リハ国を滅ぼし、牛を尊ぶ風習（アピス）を廃す
24	仏はリハ国より難をさけてインドに来て法を説いたか
25	リハ国の位置、一名エジプト国
26	スマトラ（蘇門答刺）と冬至夏至時の太陽の位置
27	南アメリカ（亜墨利加）のパラマ南回帰線に当る
28	北方グリーンランド（グリーンラント）の風土
29	北極と南極
30	赤道下の国は四季を通じて昼夜等しい
31	春分・秋分時は昼夜の長さ等しい
32	緯度・経度と昼夜の長さの関係
33	磁石の指北性
雑誌二	
34	七国一致のドイツ国
35	福音書（エウアンケリウム）とコーラン、仏教とキリスト教の性質比較
36	インド（印度）海の一身八頭の水族
37	ヨーロッパ山中に2丈の長さの蜥蜴様の物を見る
38	西洋七芸
39	三災は疫兵饑、三危礁は奕女酒なり
40	長崎・アムステルダム間の時差
41	オランダ国府と長崎の緯度・経度
42	インド中の竜
43	タバコ（煙草）の語源
44	地中海の大きさとその周辺国

45	黒海の位置とその名の由来、トルコおよびコンスタンチノーブル（コンスタンチノール）について
46	地球は正円ならずして橙実に似たり
47	南北に向けて行くものはその極に至る
48	アジア（亜細亜）海中の甲蟲は満月に脳滅す、人、水中に死すれば男は俯して女は仰く、欧羅巴はこれに相反す
49	南アメリカのラ・プラタ（フラタ）河辺の塩と海中の動物
50	形、人の如くにしてもの言わざる異物
51	狒々、人の婦人を奪うものあり
52	海中の海老の如き尾をもつ人
53	世界七不思議（七奇）
54	駝鳥と食火鳥
55	犀と象の闘い
56	象とワニ（蛟）の闘い
57	ムガル国（ムガル）のワニとその象の襲い方
58	ローマの闘技場
59	大型の獵犬（獒、ヲ、イヌ）よく獅子・象を制するあり
60	西域の樹、枝分かれして密生し家屋の如くになり、軍中の陣所とすることもあり
61	ヨーロッパ海中、小魚の為に船進まぬ事あり
62	タコを載て海中を帆の如く行く尺に満たぬものあり
63	南米ラ・プラタ河中の魚アツケリユス（アツケリユス）と河辺の風俗
64	モール教、耶蘇教、仏法3教間相互の評価
65	人魚について
66	長崎の麝香鼠、和漢紅夷の書に見えず
67	コロコテイル、一名カイマン（鼈）について
68	海豚（トルヘイン、仁魚）について
69	劍魚（スワルトヒス）の嘴が鋸に似ていることとその字義
70	ハイエナ（ヘイナ）とサラマンダー（サラマンドル）
71	極楽鳥（ハラテイルホーゴル）について
72	天竺の羊に似た獣は腹中でヘイサラバサラ（鮓答、ヘーサルバサル）を生ず
72	カイマン（鼈竜）の皮硬し
74	犬は媚る時尾を振り、獅子は怒る時尾を振る
75	獅子は尾の末に刺あり
76	獅子の子育て
77	獅子は鶏と火を恐れ、畏れ伏する人を襲わず
78	主人に忠実な獅子の逸話
79	パンテルおよびレヲバルトは獅子の類なり
80	北米の豚と珍しい草（イルハビ）
81	アジア人は米を、ヨーロッパ人は小麦をもって常食とす
82	西周りにインドに至ると1日の差を生ず
83	ヨーロッパの靈鳥ホーニッキについて
84	インド中の一大鳥キリフーンについて
85	ペリカンについて
86	スピッツベルゲン島（北方尖山、スピツヘルケ）の鴻鴈の類
87	インドのマダカスアルの大羊について
88	アラビヤの羊の尾長大にして小車を率かしむ
89	フランス（拂郎斯国）、ポルトガル（蒲麗都家国）、スペイン（イスハニヤ）の日本と比較した大きさ
90	イギリスは日本より少し大なる島国、イタリヤは日本の半分
91	仏・独・伊相互の位置関係
92	日本の東南大洋中にある数多の小島と島人の特徴

93	南米西南海における1600年頃の見聞
94	磁石の両極と相互の吸引反発現象
95	テネリハ島に天下第一の高山あり
96	ある魚（カベリヤウ）中に微小虫あり、顕微鏡にて認められる
97	山の如き海中の巨魚
98	形、猫に似た異獣（ロイアール、懶人）
99	カメレオンの性質
100	インドの330才になる長寿の人
101	アミヤントストーンという石あり、織りて火に投げるとさらに清白となる
102	ドイツ26文字を用ゆ
103	アメリカの喰人国
104	アメリカ東海の家獅子とその性質
105	インド近国に半人半獣の人あり
106	カスピ海辺に生ず羊に似た草木（羅名アクニユスセイテカ、蘭名フリユクトデイル）
107	ヘイサラバサラを出すベルシャの獣とミイラ
108	バルサム（バルセム、バルカン）とその産地
109	カスピ海中の魚、触れると手足麻痺す
110	カスピ海中の水苦し
111	ベルシャの樹脂
112	燕窩についてのケンフルの問答
113	ベルシャ国の位置
114	小獣よくカイマンを制するものあり
115	カムチャッカ（カムシカツト）の位置と風俗
116	蝦夷の東に海あり
117	南部より松前へ渡る所の船、潮に流さる
118	日本の東方および東南の方は皆アメリカの地なり
119	薩摩・琉球・呂宋・爪哇島まで島々絶えず
120	オランダ人の説に日本・モンゴル（韃靼）・イギリス・アフリカのアビシャ（アヒシヤ）国の人、武に強しとあり
121	日本の北国より阿片とオクリカンキリ（ヲクリカンキリ）を製す所あるというが、ありや否や
122	蝦夷は仏法を知らず、又唇に入墨をす、馬の如き獣は毛長くして走ること飛ぶが如し
123	ヨーロッパのカレイの如き魚（タルホツト）について
124	イタリヤの毒グモ（タランテユラ）について
125	ブレスケン号難波のこと
126	ブレスケン号難波と志筑孫兵衛の活躍
127	蘭人の1599年南米海中の島々探険時の見聞
128	ヨーロッパにオットセイ（膾膾獣）多く、その腎は薬となる
129	大象、太陽の出る方に向い跪く
130	ダス、エーラント、レヲパルト、カメレヲパルト、スレーホツク、ミュルムルデー、それぞれの動物の形状と性質
131	コゲコルレという小虫の形状と性質
132	没食子について
133	オランダ人（紅夷）は狐に怪あるとは言わず、日本の狐のみ怪あるか
134	狸はダスでもヤツカルスでもなし
135	ブドウ酒の製法
136	獣の腹中より出る塊石（ベソアルストーン）の種々の例とその考案
137	蟹の腹中より出る石（ヲクリカンキリ）について
138	ユニカールについて
139	シユフリマートの製法

140	ペレシピタートの製法
141	珈琲（コッヒー）について
142	ポルトガルの植物油
143	樹脂からとる油（テレピンテイン）
144	石鹼（サボン、一名セーブ）の製法
145	テリアカ（テリヤーカ）の製法
146	一角（ユニカール）についての諸説
147	サフラン（サフラン）の形状と特徴
148	蛇石（スランガステーン）
149	オランダの猿は尾長く、鹿は甚だ大なり、ペルシャの馬は極めて大なり
150	オランダの瑪瑙（アガートテート）の模様
151	ヤギ（野牛）の血に硝子を入れれば忽ち飴の如くなる
152	硝酸（ステルキワートル、猛水）の製法、性質、保管法
<b>下巻</b>	
<b>雑録下</b>	
<b>南亞墨利加志</b>	
153	ラ・プラタ河の辺のハイシヤという地にある川の大蛇
154	ハイシヤ川から30里離れた乾燥地帯カルコラスト
155	カルコラスト東海の高嶺
156	西洋人、南米探険にて掠奪す
157	西洋人は利を第一とし、次に耶蘇教、命は最軽とす
158	ヨーロッパの田吏野人もアメリカの皇都の文官となるべし
159	アメリカ内にある長人国（大人国）について
160	インド内にある小人国
161	マツカレスは草木繁き地にして蜂蜜極めて上品なり
162	カリヨスという土地の風俗
163	南米に西洋の属国極めて多し
164	南米東海の大魚
165	南米海中の猛魚、相闘う時は必ず大風雨生ず
166	カランテースは乾燥地にして、原住民は樹木の根の汁を取りて渴き免る
167	エベリースおよびバッカセイの人の風俗
168	シケルヒスの風俗
169	飛魚（フリーゲンテヒス）について
170	マイカエスでは羊をもって牛馬の用に代う
171	ある一群国の兵士の装束
<b>北亞墨利加志</b>	
172	メキシコの祭礼の儀式
173	メキシコ諸神の像多し
174	メキシコの葬送の儀式
175	クワクサカ国の位置と産物
176	メキシコの婚姻制度と1年の長さ
177	狐神を祭ること、人身御供、メキシコ人の風俗、諸悪獸、医業を兼務する法師、鬼神（デモン）のこと
178	メキシコ国クシロベツキの飛泉
179	エカルクワ国の婦人は夫より強し、犠牲の法、道に迷った西洋人400人を食い尽くす
<b>地中海辺志</b>	
180	紅海周辺の産畜人（バダヨウルス）の風俗
181	エジプト国の位置と気候
182	エジプト、エチオピア（エチヨベ）両国とナイル河

183	トルコのシュルタン（シユルタン）、ロードス（ローテス）島の大像、マウソリユース大王の墓、アレクサンドリア（アレキサンテリヤ）の大尖台、アンドロヒンカと名付くる像
184	カイロ城内の地形と様子
185	カイロの市に禽獣を売る所あり
186	地中海に海豚（仁魚）多し
187	仏・伊中間の河にある金沙と取り方
188	エジプト人の衣服および埋葬の様式
189	エジプト人の風俗と民族性
190	アレクサンドリア海辺の灯台とトルコに漂流した耶蘇教人の顛末
191	ベルシャ王の架けた大橋
<b>卷七</b>	
<b>西域志</b>	
192	エウハラツト河辺に瀝青（ベツキ）生ず
193	バビロンの塔について
194	ペグー（琶牛）国の四大堂と黄金の像
195	ペグー国は後のほかに三百余人の妃あり、王子は90人あり
196	ジャワ（爪哇）の隣島ビルマ（ビーマ）の女性上位
197	ムガール国の辺にあるバルラボレという所の婚姻風俗
198	カンバヤ（ガンハヤ）国の殺生を悪む風習
199	ベンガル（旁葛刺）国の辺にあるコウセという所の大耳を美とする風習
200	ベンガル国ボタントルという土地の耳の短き者を猿と名付けて賤しむ風習
201	椰子の樹（コツコスホーム）について
202	ムガール国の辺にあるバナナラスという所の埋葬形式と、ペグー国の白象および象を戦に用いること
203	ムガール国王の後宮800の妃あり
204	ジャワ島の辺にあるランバトという所よりダイヤモンド（キヤマン石）と黄金が生ず
205	ペグー国の裁判法
206	カンバヤ国の辺にあるカウルトという所の殺生を忌む風習と火葬
207	マルパール国内にあるコウシンの毒泉
208	ベルシャにあるエウハラツト河の水甚だ疾し
209	西域の人、臭気を防ぐため白檀の粉を塗る
210	ベルシャ海中のバーリン島は最上の真珠を産す
211	ガンジズ（カンヂス）河とその周辺の民族の風習
212	スペイン人、アメリカの原住民を捕え奴婢とす、心無き者は婦女を犯し梅毒（楊梅瘡）を患う
213	アメリカの鷹は羽毛最美にして甚だ美味なり
214	ペグー国のシンネルカントという地、虎多し
215	カルクフーンという鳥、極楽鳥、マニユツコスという小鳥、清水寺什物の鳳、五島の女島の鳥、ポルトガル王威勢最盛、ボルネオの樹木と葉
216	安永8年ロイアール舶来す
217	安永9年カイマンの子（鼈兒）舶上す
218	安永7年喰火喰鳥舶来す
219	蕃国千里鏡の長さもの200余フート
220	一輛四馬の車、ペガサス（ペガシユス）、鷲と蛇の闘い、樵夫と獅子の逸話
221	墓所を荒らす獅子と墓守番（ヤンヲリツ）の話
222	騾（ラバ）について
223	様々な露の種類
224	アラビヤ国辺、駝糞を用い石炭に代う
225	西洋（蕃法）の學術の分類
226	針療は中国（唐土）・インドより西方になし、灸治はアジアの西、アラビア等の国に達す、ヨーロッパは用いず
227	ヨーロッパの種々の外科療法（大半欠）

いる。

## (二) 志筑忠雄序文の復元と典拠

前章で提示した諸本の書誌から、長崎本にのみ付されていると考えられていた志筑忠雄序文は、(跋文に変化はしているものの)岡大本と横市大A本にも備わっていることが判明した。志筑序文は、著者や著作の成立年次、あるいは執筆背景を探るために有効な情報となる。よって、上記三本の写本を用いて序文の復元を試みる。

底本は長崎本を使用し、解説不能の箇所は白四角で示した上で、岡大本と横市大A本をもってルビで補う。なお、旧字は現在通用する字体に改め、読点を付した<sup>(10)</sup>。

### 序

伝不云乎、天地始初混沌未分時、想只有水火二者、水之滓脚便成地、今登高而望、群山皆為波浪之状、便<sup>是水</sup>泛如此、不知因甚麼時凝了、初間極軟、後來方凝得硬、亦云水之極濁便成地、火之極清便成風霆雷電日星之属、蓋欲知天学之模範、則須就天学家而学之、且夫地球之広大中、雖其国名不可得聞、而古昔歐羅巴人事交易、欲為其国家得利、而海陸之所通無所不回視、而測定其地之度極、著地球之図、世人雖知之未知其界内諸国之義者、然如海外諸邦人物草木禽獸其知者<sup>夫</sup>豈不知之、予繼紅毛訳家之業、有暇則閱見紅毛之書、隨見之<sup>而訳之</sup>、<sup>隨訳</sup>而記之、弟恨聞見<sup>未</sup>博、<sup>理</sup>又<sup>又</sup>陋而遺漏者<sup>尚</sup>多、誤訳亦不少、後之学広聞多之君子、改而正之則幸甚

天明二壬寅之仲秋  
肥前長崎晩生志筑忠次郎盈長叙<sup>(1)</sup>

序文の前半部分は伝統的な天地観に基づいた記述で始まる。この部分について、吉田忠はその典拠が『朱子語類』「卷第一 理氣上」であることを突き止めたが、底本の確定までには至らなかった<sup>(12)</sup>。

朱子関係の著作は、中国、朝鮮、日本で数多版行され、底本の同定は非常に困難を伴うが、差しあたって、唐本および朝鮮本『朱子語類』<sup>(13)</sup>と初印の和刻本『朱子語類』(寛文八年「二六六八」刊、国文学研究資料館蔵)を手掛かりに、これらと志筑序の該当部分とを突きあわせてみよう。なお、和刻本に付されている訓点は省略したが、両引用ともに志筑序に合わせて読点を付した。また、二重傍線は筆者による。

#### 【『朱子語類』唐本・朝鮮本】

天地始初混沌未分時、想只有水火二者、水之滓脚便成地、今登高而望、群山皆為波浪之状、便是水泛如此、只不知因甚麼時凝了、初間極軟、後來方凝得硬「…」水之極濁便成地、火之極輕便成風霆雷電日月之属

#### 【『朱子語類』寛文八年和刻版】

天地始初混沌未分時、想只有水火二者、水之滓脚便成地、今登高而望群山、皆為波浪之状、便是水泛如此、只不知因甚麼時凝了、初間極軟、後來方凝得硬「…」水之極濁便成地、火之極清便成風霆雷電日星之属

【志筑序】

天地始初混沌未分時、想只有水火二者、水之滓脚便成地、今登高而望、群山皆為波浪之狀、便是水泛如此、不知因甚麼時凝了、初間極軟、後來方凝得硬「…」水之極濁便成地、火之極清便成風霆雷電日星之屬

些少ではあるが、二重傍線部に異同が確認できる。唐本および朝鮮本『朱子語類』では「火之極輕便成風霆雷電日月之屬」とあるが、和刻版『朱子語類』では「火之極清便成風霆雷電日星之屬」とあり、「輕」が「清」に、「日星」が「日月」に変化している。志筑序も和刻版と同じく「清」、「日星」（「日」の暈字は誤記と見られる）としており、ここから志筑が和刻本を用いたことは疑いない。

和刻本に限定しても、抄本まで含めると朱子関係の著作は数多あるが、ここでは山崎闇齋が編んだ『朱書抄略』（二六八一刊）に着目したい。

まず、唐本・朝鮮本・和刻版、いずれの『朱子語類』「卷第一 理気上」においても、志筑引用に該当する部分は、終わりの方の目立たない場所に存在する一方、『朱書抄略』では上巻本文の冒頭「天地凡六十九条」の第一条に配置されており、最も目に留まる位置に配されている。さらに、とりわけ留意すべきは、『朱書抄略』に付されている編者・山崎闇齋の序である。「伝不云乎」という文句を皮切りに志筑序は展開するが、『朱書抄略』に付された闇齋序もまた「伝不云乎」に始まる。先に見た「清」、「日星」の用字も一致している。

以上から、志筑序の典拠は山崎闇齋『朱書抄略』と確定する。

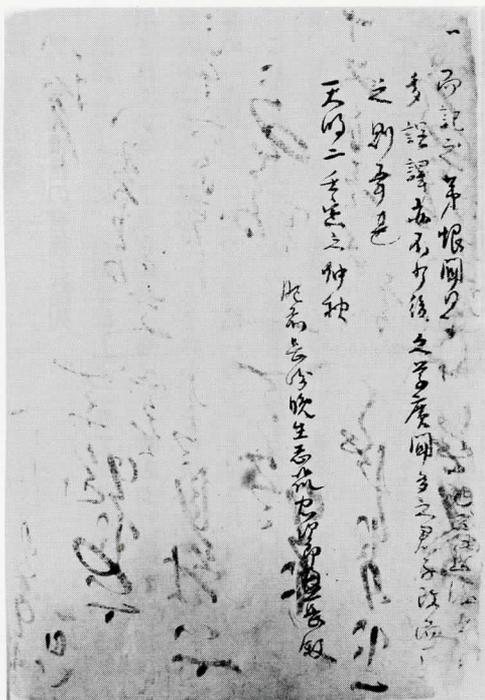


図2-2 志筑序の年記（長崎歴史文化博物館蔵）

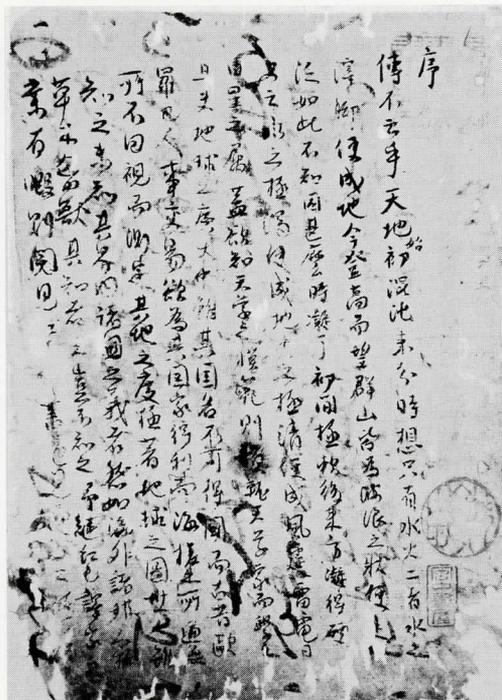


図2-1 「伝不云乎」に始まる「万国管闡」の志筑忠雄序（長崎歴史文化博物館蔵）

題朱書抄略

傳不云乎天有四時春夏秋  
冬風雨霜露無非教也地載  
神氣神氣風霆風霆流形庶  
物露生無非教也又云鷹乃  
學習又云未有學養子而后

図3-1 「伝不云乎」に始まる『朱書抄略』の山崎闇齋序（架蔵）

朱書抄略上

天地凡六十九條

徐問天地未判時下面許多都已有否曰  
只是都有此理天地生物千萬年古今只  
不離許多物朱子語類  
一下並同

○天地始初混沌未分時想只有水火二  
者水之滓脚便成地今登高而望群山皆  
爲波浪之狀便是水泛如此只不知因甚

図3-2 『朱書抄略』内題と第一条

(二) 本文の異同

ア、形態

既述したように、長崎本は上下二巻でありながら、二重に巻数が表示されている。上巻冒頭に「卷之一 雜志上」とあり、項目34から巻数表示はなく「雜志二」とされる。その後も巻数表示は無いまま、下巻の「西域志」に至って突然「卷七」と付される。

これを踏まえて諸本の形態を分類すると、上下二巻本と乾坤二巻本、七巻本、そして巻数表示の無い一巻本の三種となる。

【上下二巻本】

長崎本（巻七との表示もあり）、大洲本<sup>(4)</sup>（抄本）、岡大本、杵築本、国会本、岡大本、同朋大本、横市大B本

【乾坤二巻本】

岡大本、横市大A本

【七巻本】

岐阜歴本、津A本、津B本、架蔵本（上冊のみ存）

【巻数なし】

東洋文庫本（抄本）

まず、唯一巻数が表示されていない東洋文庫本は「玄洲」という人物から小野蘭山が筆写した本であるが、四〇項目しか備わっていない

抄本である。

次に七巻本は、巻一（項目1―33）、巻二（項目34―102）、巻三（項目103―152）、巻四（項目153―171）、巻五（項目172―179）、巻六（項目180―191）、巻七（項目192―227）となっている。巻一から三が二巻本の上巻、巻四―七が二巻本の下巻に該当する。なお、巻四は二巻本の「南亜墨利加志」、巻五は「北亜墨利加志」、巻六は「地中海辺志」、巻七は「西域志」と一致する。

最後に、「乾坤」二巻の岡大本および横市大A本は、ともに司馬江漢本に遡る写本であり、両写本は一葉に記されている行・字の位置ならびに頭注、さらには錯簡の位置まで一致する。また、諸本で最終項目となっている項目227より後に、それ以前に配置されている項目が多数収録されている。

### イ、項目の有無と配列

項目の有無に関して目に付くところを述べると、唯一長崎本に認められるものは、南北に向かうと極に至り、東西に向かうと赤道には辿り着かないことを記した項目47である。これは地球の形を述べた前項目を受けたものであり、文脈に沿った配置と言える。また、アレクサンドリア海辺の灯台とトルコに漂流した耶蘇教人の顛末を記した項目190は、長崎本のほか、岡大本、岐阜歴本、津A本、津B本、横市大Aにのみ備わっている。

対して、長崎本に確認できない一方、全ての他本<sup>⑤</sup>が有している項目もある。真っ先に挙げられるのは、福音書とコーラン、ならびに仏教とキリスト教の性質に言及した項目35で、本項目は大半の本で分割

されており、さらに、全ての他本で文脈とはそぐわない小虫に関する記述が、一つの項目としてか、或いはこれが増補された文章として備わっている。ただ、大洲本、京大本、横市大A本の三本は、長崎本と同じく小虫に関わる記述を備えていないが、一方、これら三本は項目の脱落などが多い本で、善本にはほど遠いものである。その他、長崎本の項目162に該当する記述の後に配置されているものは、アメリカで五十日移動すれば平原が広がり、そこには人家がなく、珍しい鳥や動物が多いという内容の項目であるが、これは長崎本には確認できない。

続いて、項目の配列に関して見ると、長崎本以外で項目10、11を有している本では、全てこれを項目17の後に備えている。その他、項目106の位置も特徴的で、これを上巻（巻三）の終わりに配置しているものが大半で、長崎本と同じ位置にある本は岐阜歴本、津A本、津B本である。また、スペイン人がアメリカの原住民を奴婢とし、心無き者が婦女を犯し梅毒（楊梅瘡）を患うことを記載した項目212の位置もまた注目すべきである。本項目は、長崎本以外の全ての本で、前後の項目との関連性が見出せない内容ながら、項目215を分割した間に挿入されている。

ところで、短い項目の結合や長い項目の分割もまま見られるが、長崎本で明確に一つ書きにされている項目21と22が、他本では全て一つの項目に結合されていることは留意すべきであろう。同様に、項目40と41も長崎本以外では全て統合されている。

項目109と110は、カスピ海に触れると痺れる魚がいることと、カスピ海の水の苦さに言及した記事であるが、他本では津B本を除く全てで一つにまとめられており、さらに、津B本も含めて魚の潜伏している

場所を示す記述が増補されている。

また、長崎本においては、項目179は改行しているものの一項目であるが、他本では全て二項目に分割されている（東洋文庫本では前半部分だけ掲載）。さらに、後半部分の冒頭、長崎本で「昔西洋人」とある記述が、他本では全て「フランシスキュステカライ」という具体的な人名を伴う形に変更されている。

#### ウ、記述の増減と脱字

項目4で五大州の説明が終わった後に、長崎本以外では『坤輿外記』に関する注か文章が続いている。その他、とりわけ典拠の明示に関する注か既述の増補は、至る項目で同様の現象が確認できる。

文章については言い回しが異なることはあるが、注積的な内容の増減以外は基本的に一致しているため、大きな欠文はかえって目を引く。例えば、項目68で、長崎本では「ドルヘイン」の性質が良いことを述べた後に「土水火気ノ四行ヘ一ニツキヲ以火ニ配シトルヘインヲ以水ニ配ス」と伝統的な宇宙観に基づく文章が添えられているが、他本でこの一文が確認できるものは無い。加えて、項目225で「ゲシクトキキユンデ視学ト訳シテ遠鏡□<sup>ノカ</sup>功夫ノ起ル所ノ学ナリ」が脱落しているものが多い。これを備えているものは、岐阜歴本、津B本、横市大A本の三本のみである。

もう少し小さい欠文で言えば、イギリス人が航海術に優れていることを説く項目15の締め括りの一文「暗危利亜是ニ答フ」が全ての他本で欠如しており、さらに、項目69の末尾で剣魚の字義を説く記述、項目105で和書に基づいて半人半獣の人が韃靼國中に存在すると述べるく

だり、或いは項目123で「タルホット」という魚を「カレイノ如キカ」と推測する末尾、項目171末尾の「武侯祠山ノ神兵ノ如シ」などが長崎本以外で確認できない。

反対に、温帯について説明する項目9では、寒帯について説くくだりが、長崎本を除く全ての他本で備わっている。その他、アメリカの喰人国について説明した項目103などでも同様の現象が認められる。

決定的な脱字としては、項目148の「試金石」である。これを脱落せずに備えているものは、岡大本、岐阜歴本、津A本、津B本、横市大A本である。

#### (四)「万国管闈」の受容

##### ア、志筑序欠如本の受容

ここまで見てきたように、志筑序を備えている本は、長崎本と、跋ではあるが司馬江漢書写本に遡る岡大本と横市大A本のみであった。この状況を読み解くにあたって、津A本が有する校訂者・稲垣定毅による序が手掛かりになる。

##### 校正万国管闈序

万国管闈七卷得之京師之市、雖未審何人所著、以書中有安永年号考之、則當時長崎訳司某之所録者明也、此書也大則天地日月之變、

細則虫魚草木之異、無不盡載焉、頗為珍奇矣、余偶得一本、秘□<sup>講</sup>帳中久矣、惟憾<sup>マ</sup>騰写杜撰、謬誤錯乱、文理不属、不可読者十七八、

若夫蛮名不得毎日撃者、何如当推類而正焉、頃者聊輯旧聞以真名校之、欲使読者無誤写之疑而已、蓋雖不願求譽於朋友、恐却知不

免求全之譏、且其国名未得詳漢訳者、姑従旧本以俟識者云

文化壬申十月既望

竹箴居士自題（渦巻朱印、「凸頭牧人」朱印）

紀 信實謹書

ここから分かるのは、第一に、「万国管闕」が京都の市で流通していたこと。第二に、稲垣定穀が文化壬申（一八一二）十月までに購入したこと。第三に、定穀が「未審何人所著」と、著者が誰かを認識していないことである。

なお、写本が「騰寫<sup>「マヤ」</sup>杜撰、謬誤錯乱、文理不属、不可読者十七八」というような状態であったことが明記されているが、寛政六（一七九四）から文化九（一八一二）にかけて記された本居宣長の随筆『玉勝間』第一編「古書どもの事」に「心なき商人の手にてしたつるは、利をのみはかるから、こゝかしこひそかにはぶきなどもして、物するほどに、全くよき本はいとまれにのみなりゆくめり<sup>〔16〕</sup>」とあるように、市場に流通していた写本は、商人の手によって改悪されるなどした粗悪な本が大半を占めていたようである。無論、この「万国管闕」に限っては、写本販売者が入手した時点で既に粗悪な本であった可能性もある。

話を元に戻すと、宇宙から草木虫魚まで記された著者不明の珍奇な博物書が市場に流れていたことが、定穀の入手背景であった。つまり、購入動機や入手経路に志筑忠雄の名前は関係しなかったのである。この定穀の受容の在り方は、志筑序が脱落した「万国管闕」が広がった、一つの典型的な背景であったと考えられる。

イ、伝松村元綱本と吉雄耕牛系統本

同大本は「松世綱 安之君説」とあり、松村元綱の著作である可能性を示す一本である。ただ、同大本は脱落項目がままあり、また、注釈的な記述の増加や欠文などは他本と大きく変わるものではなく、特有の要素を備えていない本と言える。

特徴的な要素が見られる箇所としては、長崎本で項目98に該当するロイアールに関する記事が挙げられる。そこには長崎本などにはない、吉雄耕牛がロイアールを所持していたことや、それが寒さで死んだことなどが内容に盛り込まれているが、これは津B本に確認できる耕牛注と同じ内容である。

同様に、長崎本で項目159に該当する、長人国（大人国）について説いた記述の後に、天明元年（一七八二）にオランダ人が日本への渡航途中の島で、三尺に満たない法師を五、六人発見したが、捕獲に失敗した旨を長崎で阿蘭陀通詞に語ったとする内容を記した一項目が設けられているが、これも津B本の同項目に付された耕牛注と一致することから、注を一つの項目に仕立てたものと見るべきである。さらに、項目215に付された謙という不明人物による注についても、津B本で耕牛注として確認できる。

このことと、先に見た稲垣定穀序の「雖未審何人所著、以書中有安永年号考之、則當時長崎司某之所録者明也」などを勘案すると、同大本は、吉雄耕牛系統の転写本を入手した人物が、本文の年号や内容を手掛かりに、後付けで松村元綱の名を書き入れたものと見てよい<sup>〔17〕</sup>。

## ウ、長崎本の位置づけ

有している要素が長崎本と近い本を強いて挙げれば、岐阜歴本と、錯簡や脱丁はあるものの司馬江漢本に遡る岡大本と横市大A本、そして稲垣定穀が吉雄耕牛本と校訂した津B本の四本である。

まず、岐阜歴本には文章が途中で切れる不自然な個所があり、かつ長崎本の項目120から127に該当する八項目が項目147の後ろに配置されており、他本と大きく項目配列が入れ替わっている部分が認められ、原本からほど遠い本と見える。

ついで、岡大本と横市大A本は、長崎本以外で、跋ではあるが唯一志筑序を備えた本であり、寛政甲寅（一七九四）十一月に司馬江漢の筆写に遡る。岡大本、横市大A本ともに途中錯簡があり、項目227の後にそれ以前の項目が記されており、構成を無視した配列となっている。なお、ここで両者の位置づけを考察しておく、岡大本はその項目227の後にも脱丁があり、横市大A本は完全に揃っている。ただ一方で、項目51は狒々（ひひ）をめぐる記述であるが、岡大本が「狒々」とあるのに対し、横市大A本では「獅々」と誤っている。すなわち、岡大本と横市大A本は江漢筆写本から別々に転写されたものと見ることができ、より原文に近い記述を有する岡大本が脱丁を生じたものと考えられる。また、江漢系統本は他に確認できず、普及した様子は確認できない。

最後に、津B本は吉雄耕牛が所有した本をもって稲垣定穀が書写校訂した一本で、項目215の耕牛注となっている謙注を見れば、杵築本、国会本、津A本、同大本、同朋大本に確認でき、ここから耕牛蔵本の広がりが見て取れる。尾張の貸本屋・大野屋惣八が所有した国会本も

耕牛系統本であった。

さて、津B本は志筑と極めて近い関係にあった耕牛本と校訂したことで原本との距離が近い要素を有する本であることが想定でき、諸本の中で津B本と長崎本のみが項目109と110を別項目としていることは、原型が二つの項目であったことを意味していると考えるのが自然である。よって、この項目に関して、長崎本は原本の形式を備えていると見てよい。ただ、津B本その他の要素を分析する限り、項目の有無・配置、文章の増減など、あらゆる要素が他本のそれとは異なるらず、一方、長崎本とは随分距離があると言わざるを得ない。

以上、長崎本と比較的距離が近いと見られる四本について考察したが、長崎本と随分かけ離れたものであることが明らかになった。項目の有無・配置を検討する限り、長崎本は基本的な項目を過不足なく備えつつ、項目の配列は巻の構成や前後の流れに沿っており、さらに脱字の類も見当たらない。また、他本全てに付されている典拠を示す注釈的記述や文章が長崎本のみ確認できない事例は枚挙に遑がなく、長崎本の記事は基幹的文章で構成されていると言える。反対に、一項目ではあるが長崎本にのみ認められる記事もあり、かつ全ての他本に認められない文章が長崎本のみ有している事例も少なくない。この長崎本にのみ認められる文章は、著者の推測や考えを示すために添えられた一文が多い。

ここまでの考察で、長崎本が志筑忠雄原本に極めて近い本であることはもはや言を俟たないが、志筑と交友関係にあった吉雄耕牛が所有していた本でさえ志筑序を備えていなかったことを勘案すると、長崎本を原型であると見てよいかと思われる。そして、そう見ると、その

巻数表示が不明朗なため、後世に二巻本と七巻本が出現するという書物形態の錯綜が生じたことにも合点がいく。ただし、長崎本が自筆稿本であるかどうかについては、写しの可能性もあるため確定できず後考に俟ちたい<sup>(18)</sup>。

### おわりに

全国に点在する諸本を収集し、文献学的に検討した結果、自筆本説の真偽はさておき、これまで示唆されてきた通り、長崎本は志筑忠雄が著した「万国管闡」原型と見做しうるといふ結論に辿り着いた。

さらに、「万国管闡」に付された志筑序を復元し、朱子の言葉から引いた伝統的な天地観に関する冒頭の文句の典拠を搜索したところ、山崎闇斎『朱書抄略』(二六八一刊)を底本としていた事実が判明した。このことは、ただに典拠の解明のみにとどまらず、これまで謎に包まれていた若き日の志筑忠雄の学問背景を物語る貴重な資料となる。

また、世界の博物誌的な記事から成る「万国管闡」は、吉雄耕牛、司馬江漢、小野蘭山、大塚同庵、稲垣定毅、西川吉輔、佐竹得照、深澤陳清といった近世読者に入手された。大坂の町人学者・山片蟠桃はその著「夢ノ代」(一八二〇跋)において、海外地理の情報源として「万国管闡」を利用しており、釈円通『仏国曆象編』(一八一〇序)でも、疑わしい西洋の地理書の一つとしてその書名が挙げられている<sup>(19)</sup>。ただ、「万国管闡」の受容の在り方が、志筑の他の著作におけるそれとは一線を画するものであったことには留意すべきである。すなわち、オランダ語学・文法に関わる著作では「柳圃先生」の名が尊ばれ、

かつ代表的な天文・物理学書「曆象新書」(一八〇二成)もまた「志筑忠雄」の名前により箔が付き、享受された。ところが、「鎖国論」(一八〇一成)では、「西洋人ケンペル」の名がとりわけ重視され、ほとんど志筑の名が顧みられない形で伝播した。

一方、まだその名が世間に周知されていなかった時代の著作である「万国管闡」に関しては、大半は志筑著作であることが知られないまま広がったようである。写本の受容を考えると、長崎本以外で、跋としてではあるが唯一志筑序を有する司馬江漢本はそれほど広がりを見せず、流布したのはむしろ、吉雄耕牛系統本をはじめとして、志筑序が脱落した、原本とはかけ離れた本であった。

志筑序脱落本の伝播の在り方を検討すると、個人間の転写を通じて広がったものの、尾張の貸本屋・大野屋惣八によって流布したものの、そして稲垣定毅が京都で入手したように、書肆によって著者不明の珍奇な海外の博物書として市場に流通し、購入を通じて受容されたものなどが想定される。以上が志筑序を有さない「万国管闡」が多数伝存する背景だと考えられ、多くの近世読者は、志筑の名を認識しないまま、原型から変容した「万国管闡」を享受したと見られる。

### 注

(1) 以下、近世に成立した書物について、写本は鍵括弧で示し、版本は二重括弧で示した。

(2) 吉田忠「志筑忠雄『万国管闡』について」(『長崎談叢』第五三輯、一九七二年)。

(3) 松田清は、現長崎歴史文化博物館本以外に七本の存在を指摘している。

『洋学の書誌的研究』（臨川書店、一九九八年）、一五〇頁。

- (4) 志筑の自筆稿本であると初めて言及したのは古賀十二郎。ただし、どこにも根拠は示されていない。古賀十二郎著、長崎学会編『長崎洋学史』上巻（長崎文献社、一九六六年）、三三八頁。

(5) ある種の志筑忠雄訳「鎖国論」（一八〇一成一）写本に確認できる大田南畝「読鎖国論」も序となつてゐる場合と、跋となつてゐる事例が確認できる。拙著『鎖国』という言説——ケンペル著・志筑忠雄訳「鎖国論」の受容史——「補論」（ミネルヴァ書房、二〇〇九年）参照。

(6) 前掲松田清『洋学の書誌的研究』、一五〇頁。

(7) 筆跡から竹篋居士は稲垣定毅と同一と定めて可。中川豊「稲垣定毅書写年表」（『中京大学会論叢』第三号）『中京国文学』通号三六、二〇一七年）と、津図書館の川上裕子氏の御教示による。なお、「竹篋」は「竹篋」と表記してゐることもある。

(8) ただし、作者は「志築忠義」と認識してゐたようである。武知正晃「西川吉輔の海外情報収集とその認識」（衣笠安喜編『近世思想史研究の現在』、思文閣出版、一九九五年所収）、三〇九〜三二〇頁。

(9) 表1は、前掲吉田忠「志筑忠雄『万国管闕』について」掲載の表（二二頁）を参照。表2で項目名を参照した「附録」（三七〜四四頁）は、項目を登場順ではなく、内容別に配列したものである。

(10) 吉田忠は、前掲「志筑忠雄『万国管闕』について」（二四〜二五頁）において、長崎本のマイクロフィルムに基づいて志筑序文の翻刻を示したが、解説不能の箇所が多々見られた。そこで、原本にあたってみると、解説可能となつた箇所が多いため、自身の翻刻を示した。

(11) 引用文は現在通用する字体に改めた。特に断りをしない限り、以下全ての引用文で同。

(12) 吉田忠「志筑忠雄——独自の思索家」（W・ミヒエル、鳥井裕美子、川眞人共編『九州の蘭学——越境と交流——』、思文閣出版、二〇〇九年所収）、一〇六頁。

(13) 垣内景子・恩田裕正編『朱子語類』訳注 卷一〜三（汲古書院、二〇〇

〇七年）を使用した。この書籍の底本は、中華書局・理学叢書『朱子語類』であるが、『朝鮮古写 徽州本主旨語類』（中文出版社）、『朝鮮整版 朱子語類』（中文出版社）、『朱子語類』（正中書局）、和刻本『朱子語類大全』（中文出版社）を用いて校注が付されている。

(14) 以下、諸本は所蔵機関の略称をもって示した。

(15) 「全ての他本」というような表現においては、抄本などでそもそも項目を備えていない本については、特に必要の無い限りは言及しなかつた。

(16) 村岡典嗣校訂『玉勝間』（上）（岩波文庫、一九九五年第一八刷）、二六頁。

(17) 著者名が変わる事例としては、志筑著作の関連で言えば、前述した「読鎖国論」の作者が大田南畝ではなく、福岡藩の蘭学者・青木興勝となつてゐる事例が確認できる。前掲『鎖国』という言説、二五一頁。

(18) 早稲田大学図書館が所蔵する伝大槻玄沢宛志筑忠雄書簡と「万国管闕」では筆跡が異なるため、現時点で判断できない。

(19) 「夢ノ代」では「地理第二」の項目二二〜二五で利用されており、『仏国曆象編』においては卷之三「地形第三之二」（九丁表）に認められる。前掲吉田忠「志筑忠雄『万国管闕』について」、三二〜三四頁。

【付記】写真掲載を許可くださった長崎歴史文化博物館をはじめとして、資料調査で御世話になつた各所蔵機関に御礼申し上げます。